





『ぼくはだれもない世界の果てで』
M. T. アンダーソン/作 ケビン・ホークス/絵
柳田 邦男/訳 (小学館)




少年は、誰もいない「世界の果て」で、ひとりきりで楽しく暮らしていた。ところが、奇妙な実業家が現れて、その土地をレジャーランドに変えてしまう。いちばん自分にあった生き方は何か、大切なものは何かを考えさせる絵本。

『やくそく』
ニコラ デイビス/文 ローラ カーリン/絵
さくま ゆみこ/訳 (BL出版)




ある晩、スリの少女はおばあさんのカバンをひったくろうとした。すると、ある「やくそく」をするならと、おばあさんはカバンを手放した。そのカバンに入っていたのはドングリ。やくそくの意味に気づいた少女は…。

『人生って、なに?』
オスカー・ブルニフィエ/文 西宮 かおり/訳
ジェローム・リュイエ/絵 重松 清/日本版監修 (朝日出版社)



「人生」について楽しく考える絵本。6つの大きな問題へのいろいろな考えを紹介。それをあれこれ組み合わせたりして、きみだけの答えをさがしてみよう! 子どもと本気で語り合いたい大人にもおすすめ。

『これから戦場に向かいます』
山本 美香/写真と文 (ポプラ社)



戦場で何が起きているのかを伝えることで、いつの日か、何かが変わるかもしれない。シリアの戦場で銃弾に倒れたジャーナリスト・山本美香のメッセージを写真とともにつづる。

『天井からジネズミ』
佐伯 元子/文 あべ 弘士/絵 (学研教育出版)




作業小屋の天井のあなから、ぽとりと落ちてきたのは、わずかに3センチの小さな生き物。それは、モグラの仲間の「ジネズミ」の赤ちゃんだった。試行錯誤しながら、小さな命を育てる感動作。

『特別な一ぴき』
岡田 朋子/文 (国土社)




家族としてペットを迎えるとき、人はどのように特別な一ぴきと出会うのでしょうか? 学校などで、動物とのふれあいを通して「いのちの大切さ」を伝える活動を行っている著者が、捨て犬・捨て猫のいない世の中の実現を訴えます。

『アカシア書店営業中!』
濱野 京子/作 森川 泉/絵 (あかね書房)



アカシア書店の、児童書コーナーの危機! 読書好きの大地は、本を守るために行動開始。もっともっと、みんなに本の楽しさを知ってもらうには…。智也、真衣、琴音と、いっしょに、次々にくり広げる作戦の結果は?

『劇団6年2組』
吉野 万理子/作 宮尾 和孝/絵 (学研教育出版)



卒業前のお別れ会で劇をすることにした6年2組。苦労する立樹たちに意地悪を言う慶司。慶司は昔子役で嫌な思いをしたのだ。練習するうちに疑問が広がった立樹たちは、役の気持ちを考えながら、自分たちの芝居を作ること…。



『ケンガイにっ!』

高森 美由紀/作 加藤 休ミ/絵 (フレーベル館)



家族ばらばらの食卓、オンラインゲームどっぷりの生活を送っていた俊は、夏休みをいなかのばあちゃんの家で過ごすことになった。けれども、そこはスマホも言葉も通じなくて…。

『それぞれの名前』

春間 美幸/著 (講談社)



チカとユカはそっくりな双子。最近、チカは千代田君には、自分がチカだって見分けてもらいたいと思っている。そんな千代田君は、自分の下の名前が気に入っていないみたいで…。自分の名前のことを考えたくなる物語。

『ツクツクボウシの鳴くところに』

堤 しゅんぺい/作 黒須 高嶺/絵 (文研出版)



夏休み、担任の堤先生から信じられない話を聞いた。先生が5年生のときの仲良し3人組と、ぼくたち3人組がシンクロしているというのだ。先生は、ぼくたちに先生たちと同じ運命をたどらせたくないらしくて…。

『晴れた日は図書館へいこう』

緑川 聖司/作 宮嶋 康子/絵 (小峰書店)



本と図書館が大好きな女の子が図書館で出会ういろいろな人々との交流や、図書館で起きるちょっとした事件をミステリアスタッチに描く。第一回日本児童文学者協会会長編児童文学新人賞佳作受賞作品。

『丸天井の下の「ワーオ!」』

今井 恭子/作 小倉 マユコ/画 (くもん出版)



“元気印のマホ”が“読み書きが難しいマホ”という自分に絶望していた小六の夏。謎の美男子・正樹との出会いをきっかけに、この世で生きている存在意義を全身全霊で感じ…。読み書きが困難な学習障害児の成長を描く。

『リンデ』

とき ありえ/作 高島 純/絵 (講談社)



お母さんを不慮の事故で亡くし、深い悲しみにくれる少年が、大型犬のリンデと過ごす毎日から、「生きること」の確かさを自分なりにつかみ取っていく物語。

『こんにちはアグネス先生』

K.ヒル/作 宮木 陽子/訳
朝倉 めぐみ/絵 (あかね書房)



1948年、アラスカの小さな村に赴任してきたアグネス先生。今度の先生は、今までと少しちがうと10歳の少女フレッドは思う…。新しい世界の扉を開いたひとりの教師と子どもたちの1年を、あたたかく描く。

貸し出し中の本は
予約も出来ます。
詳しくは職員に
お尋ねください。

